

氏名	こ だま しげ あき 児 玉 茂 昭
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 251 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	ギリシア語 s 語幹中性名詞の歴史的研究

論文調査委員 (主 査)  
教授 吉田和彦 教授 庄垣内正弘 教授 佐藤昭裕

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文で考察されるのは、*πλάτος*“width”, *κῦδος*“glory”のように、語根に母音  $\epsilon$  を持たないという形態的な特徴をもつギリシア語 s 語幹中性名詞である。ギリシア語の s 語幹中性名詞は、 $-\sigma$  を語尾に持つものと  $-\alpha\varsigma$  を語尾に持つものとの二つに大別することができる。前者がギリシア語 s 語幹中性名詞の大部分を占め、後者は約30語ほどの小さなグループをなすに過ぎない。前者については、その約半数が、後者については、語根に母音  $\eta$  をもつ *γῆρας*“old age”のみが、本論文で考察の対象となる。本論文において、語根に  $\epsilon$  をもたない s 語幹中性名詞を考察の対象とするのは、以下のような理由による。

Schwyzler (1959) などにおいては、語根に  $\epsilon$  をもたないギリシア語 s 語幹名詞は、印欧祖語の段階で形成された語がギリシア語に継承されたのではなく、ギリシア語の段階で他の語から様々な手段を用いて派生されたものであると考えられている。

事実、ギリシア語以外の印欧語諸言語、たとえば、サンスクリット語やラテン語などとの間に対応を見出すことのできるギリシア語の s 語幹中性名詞の多くは、語根に  $\epsilon$  を持っている。それらの一例を示すならば、ギリシア語 *γένος*“race”は、サンスクリット語に対応する形式 *jānas*-“race”, ラテン語に *genus* “race”を持つ。このように他の印欧語諸言語との間に対応を見出すことが可能であるという事実は、*γένος* が祖語の段階に存在していた語を継承した形式であるという推論を支持する強力な証拠となる。

これに対して、 $\epsilon$  を語根に持たない s 語幹中性名詞の多くは、ギリシア語以外の印欧語諸言語に対応する形式を見出すことができない。このことは、それらの s 語幹中性名詞が祖語から継承されたものではなく、ギリシア語の段階で形成されたものであるという見解を支持すると考えられ、この見解は、広く受け入れられている。

本論文では、ギリシア語の  $\epsilon$  を持たない s 語幹中性名詞について考察することで、この広く受け入れられている見解の妥当性を検証することを目指す。より具体的には、以下の二つの問題について考察と検証を行うことになる。

1.  $\epsilon$  を語根に持たない s 語幹中性名詞の中に、祖語にまで遡ると考えられる形式が存在するかどうか。
2. そのような形式が存在する場合、どのようにして祖語からギリシア語にその形式が継承されたか。

この二つの問題について検証を行うために、第二章以下ではつぎのような順序で議論を行う。

第二章では、第三章以下で議論を行うために必要となる前提について概説する。まず、印欧祖語に再建される母音と子音の音体系について 2. 1 節で述べる。次に、2. 2 節では、名詞を構成する要素である、語根・接辞・語尾について述べる。語根について述べた部分では、伝統的な語根理論と、喉音 (laryngeal) の発見によってより洗練された形に変わった現在の理論との違いについて、また、Benveniste (1935) で彼が唱えた語根理論について、特に詳しく記述する。接辞について述べた部分では、複数の異なる接辞の間にみられる関係として知られている、いわゆる Caland's System についてやや詳細に述べる。これは、Caland's System が s 語幹中性名詞の形成において、重要な役割を果たしていると考えられるからである。

2. 3節は、名詞の曲用や動詞の活用において、母音交替が語のアクセントとのかかわりの中でどのようにあらわれていたか、という問題を検証することにあてられている。まず、印欧語の諸言語に広く分布している母音交替という現象が、祖語の段階に存在したと考えられるどのような現象を継承しているものであるかについて述べる。この母音交替という現象は、語の文法的な機能などによって、語根・接辞・語尾などの語のある要素にあらわれる母音が、音色や音長を変化させる現象である。母音\*eがあらわれる場合をe階梯、母音\*oがあらわれる場合をo階梯、母音があらわれない（しばしばこの状態を\*∅であらわす。）場合を零階梯と呼ぶ。また、母音が短母音である場合を正常階梯、長母音となってあらわれる場合を延長階梯と呼ぶ。

次に、母音交替という現象が、印欧祖語の一部の名詞の曲用において果たしていたと考えられる役割について明らかにする。印欧祖語の段階において、接辞の末尾に母音\*e/oを持たない名詞は、athematicという範疇に分類され、単数主格に代表される強語幹と、単数属格に代表される弱語幹との間で、語の要素である語根・接辞・語尾が、母音交替を行っていたと考えられている。この母音交替は無秩序に行われるのではなく、いくつかのパターンにしたがって行われていたと考えられている。2. 3節は、この祖語の段階に存在していたと考えられる母音交替のパターンを再建することにあてられている。

パターンの再建にあたって用いられる手法は二つである。一つは、印欧語族の複数の言語に例証される、パターンの全部、あるいは一部を継承したと考えられる名詞の対応を比較することによって、パターンの全体像を明らかにするという手段である。もう一つは、ある名詞に部分的に残された特徴からパターンの全体像を再建するという手段である。これらの手段を用いて、現在のところ、印欧祖語には、acrostatic, proterokinetic, hystero-kinetic, amphikineticと名付けられた4つの母音交替のパターンが存在したことが明らかにされる。

第三章では、本論文で考察の対象となるs語幹中性名詞について、一つ一つ語源や派生関係について検証する。

第四章の冒頭部分である4. 1節では、第三章で行われた検証の結果、語根にεを持たないs語幹中性名詞には、かなりの割合で他の分派言語に対応する形式を持たず、したがって語源や派生関係について明らかにすることができないものが存在することが述べられている。しかし、その一方で、無視できない数のs語幹中性名詞が、祖語から継承されたものである可能性をもつことが指摘されている。これら祖語から継承されたと考えられる形式は、大きく二つのグループに分けることができ、以下のような特徴を持っている。

一つ目のグループは、u語幹形容詞と意味的な関係をもつ形式である。たとえば、πλάτος“width”は、u語幹形容詞πλατύς“wide”と意味的に関係していると考えられる。このπλάτοςとπλατύςとの対応は、2. 2節で概観したCaland's Systemの中に位置づけることができる。

また、πλάτοςは、サンスクリット語の名詞práthas “width”に対応し、したがってギリシア語に孤立して存在しているのではなく、サンスクリット語の形式と共通の祖形から継承されたと考えることが可能である。さらに、このギリシア語の形式とサンスクリット語の形式との間には、母音交替という観点から見た場合に、非常に興味深い差異があらわれている。それは、ギリシア語の形式は、祖語において語根の母音が零階梯を示していた形式を継承していると考えられるのに対し、サンスクリット語の形式はe階梯を示していた形式を継承していると考えられる点である。4. 2節で、この差異がいかなる理由によって生じたものであるか、という問題も含め、u語幹形容詞と意味的な関係を持つs語幹中性名詞についての考察を行う。

もう一つのグループは、語根にηをもつs語幹中性名詞のうちで、そのηが祖語の\*eを継承したと考えられるs語幹中性名詞である。\*εを継承したと考えられる形式が重要であるのは、γένοςのような語根にεをもつs語幹中性名詞に対して行われる説明では、この\*eをもつ形式を説明することができないためである。これらの形式については、4. 3節で考察を行い、\*εに対する説明を与える。

4. 2節では、u語幹形容詞と意味的な関係をもち、祖語から零階梯の語根を継承したと考えられるs語幹中性名詞についての考察を、以下のような手順に従って行う。

考察を進めるにあたって、まず、4. 2. 2節で、Schindler (1975)で行われた、印欧祖語におけるs語幹中性名詞の曲用の再建について概観する。これによれば、e階梯を示す語根を祖語から継承したと考えられるs語幹中性名詞は、2. 3節で示した母音交替のパターンのうち、proterokinetic typeと呼ばれるパターンを祖語の段階で示していたものと考えら

れる。このパターンは、強語幹においては語根が e 階梯を、それ以外の要素は零階梯を示し、弱語幹においては接辞が e 階梯を、それ以外の要素は零階梯を示すようなパターンである。

続いて 4. 2. 3 節では、u 語幹形容詞の母音交替のパターンの再建が行われる。これによれば、u 語幹形容詞のうちで零階梯の語根を祖語から継承したと考えられる *πλατύς* のような形式は、*hysterokinetic type* と呼ばれるパターンの母音交替を行っていたと考えられる。このパターンは、強語幹においては接辞が e 階梯を、それ以外の要素は零階梯を示し、弱語幹においては語尾が e 階梯を、それ以外の要素は零階梯を示すようなパターンである。注意すべきなのは、このタイプに分類される u 語幹形容詞においては、語幹の強弱にかかわらず、語根は一貫して零階梯を示していたと考えられる点である。

4. 2. 4 節では、4. 2. 2 節および 4. 2. 3 節で行われた、s 語幹中性名詞と u 語幹形容詞の母音交替のパターンについての議論をふまえて、*πλάτος* に代表される、u 語幹形容詞と意味的な関係を持ち、祖語から零階梯の語根を継承したと考えられる s 語幹中性名詞についての議論が行われる。明らかにされるべき問題は二つある。一つは、それらの s 語幹中性名詞がどのような過程を経て祖語からギリシア語に継承されたかという問題である。もう一つは、ギリシア語の形式は語根に零階梯を、対応するサンスクリット語の形式は語根に e 階梯を継承していると考えられるという問題である。これらの問題に対しては、各々以下のような解釈が与えられる。

語根が零階梯を示す *πλάτος* のようなギリシア語 s 語幹中性名詞は、語根が零階梯を示していたと考えられる弱語幹が、類推によって、e 階梯を示していた強語幹にも広げられた形式に由来する。この類推は、*γένος* などがこうむったと考えられる類推とは逆方向に行われているが、その原因となったのは、語根が強語幹・弱語幹を問わず零階梯を示していたと考えられる u 語幹形容詞の影響であると考えられることができる。

これに対し、サンスクリット語に継承された形式では、*γένος* などと同様に、強語幹が弱語幹を置き換えるという方向に類推が働いた。このような類推が行われた原因として、サンスクリット語には、*práthati* “makes broad” という動詞の存在があることを指摘できるかもしれない。

4. 3 節では、*γῆρας* のように、語根に祖語の \*ē を継承したと考えられる母音 η をもつ s 語幹中性名詞について考察する。これらの s 語幹中性名詞は、祖語において *proterokinetic type* の母音交替を行っていたとは考えられない。なぜならば、上述したように、*proterokinetic type* の母音交替においては、語根にあらわれるのは、\*e か \*∅ で、\*ē があらわれることはないからである。

4. 3 節では、祖語の \*ē を継承したと考えられる *γῆρας* とならんで、祖語の \*e を継承したと考えられる母音 ε を語根にもつ s 語幹中性名詞 *γέρας* “gift of honor” が存在することが示される。*γῆρας* と *γέρας* は、同一の語根から形成されたと考えられる s 語幹中性名詞で、音対応の観点からみた場合には、語根に祖語の \*ē を継承した母音を持つか、それとも祖語の \*e を継承した母音を持つかという点だけが異なっている。

また、*γῆρας*、*γέρας* と同様に、同一の語根から形成されたと考えられる、語根に \*ē に由来する母音をもつ s 語幹中性名詞と、語根に \*e に由来する母音をもつ s 語幹中性名詞との対応が、ギリシア語には、上に挙げた *γῆρας* と *γέρας* 以外にも存在すること示される。また、サンスクリット語の *ágas* “(religious) sin” と *áγος* “pollution” のように、ギリシア語の形式と、ギリシア語以外の分派言語の形式との間で、語根に \*ē をもつと考えられる形式と、語根に \*e をもつと考えられる形式との語源的な対応を見出すことができる場合があることも示される。

4. 3. 4 節では、このような \*ē と \*e との対応が、*acrostatic type* と呼ばれる母音交替のパターンに由来するという指摘が行われる。このパターンにおいては、強語幹において語根が \*ē 階梯、それ以外の要素が零階梯を示し、弱語幹においては語根が e 階梯、それ以外の要素が零階梯を示す。

*γῆρας* のように \*ē を継承した母音を語根にもつ形式は、\*ē を語根にもつ強語幹で、\*e を語根にもつ弱語幹を置き換えたと考えることができる。*γέρας* は、逆に弱語幹で強語幹を置き換えたと考えることができる。このようにして、本来は強語幹と弱語幹の対立を示すものであった語根の \*ē と \*e の対立が、二つの異なる語の対立を示すために用いられるようになったと思われる。

このように、置き換えが異なる二つの方向に行われた理由については、*γῆρας* と *γέρας* にみられる意味の違いに原因を求めることができるように思われる。つまり、意味の違いを形式に反映させるために、もとは同一の語の異なる曲用形であっ

たものから、二つの形式的に異なる語を派生させることを目的として、このような置き換えが行われたと説明することができる。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、ギリシア語の s 語幹中性名詞に対して、印欧語比較言語学の立場から歴史的な考察を試みたものである。印欧語名詞にみられる母音交替の問題は、近年めざましく研究が進展している分野である。Jochem Schindler の画期的な研究によれば、s 語幹中性名詞の多くは、印欧祖語の時期において、強語幹では語根にアクセントが落ちるが、弱語幹では接尾辞にアクセントが落ちる、いわゆる proterokinetic タイプの母音交替によって特徴づけられていた。この起源的な状態は、二次的な変化を受けながらも、たとえばギリシア語 γένος“race” ~ γένεος (ホメーロス)、サンスクリット語 jánas ~ jánasas, ラテン語 genus ~ generis などにおいてなお保持されている (印欧祖語 \*ǵénh<sub>1</sub>-s ~ \*ǵnh<sub>1</sub>-és-s > \*ǵénh<sub>1</sub>-es ~ \*ǵénh<sub>1</sub>-és-es > \*ǵén-os ~ \*ǵen-és-os > γένος ~ γένεος)。本論文は、このような最新の研究成果を組み込みながら、語根の母音が e 以外のギリシア語 s 語幹名詞に対して、独自の知見を提出している。

第 1 章では、本論文が考察の対象とする 2 つの問題が明確に示されている。すなわち、Schindler の研究では扱われていない、e 以外の語根母音を強語幹に持つギリシア語 s 語幹名詞のうち、印欧祖語にまで溯る形式が存在するかどうかという問題、さらにそのようなギリシア語の形式が存在する場合、それらが印欧祖語の段階からどのような歴史を経て成立したのかという問題である。

第 2 章で母音交替を支配する一般原理に基づく方法論と分析の前提となる基本的な考えが示されたあと、第 3 章において本論文の分析の対象である e 以外の語根母音を持つギリシア語 s 語幹名詞 133 例が示され、これらそれぞれの名詞に対して、先行研究に配慮しながら、もっとも蓋然性が高いと考えられる語源が示されている。この第 3 章で収集された包括的なデータは、続く第 4 章において母音交替という視点から行われる分析の前提となるものであり、非常に貴重なものである。

第 4 章では、第 3 章で示されたデータの分析によって、2 つの実質的な知見が引き出されている。ひとつは語根母音として α を持つ名詞に関してである。語根母音が α である s 語幹中性名詞のなかには、近い意味を持つ u 語幹形容詞を持つものがいくつかある。たとえば、πλάτος“width”という s 語幹名詞には、これと派生関係にある u 語幹形容詞 πλατύς“wide”がある。これらに対応する形式として、サンスクリット語に práthas-“width”と pṛthú-“wide”があるので、πλάτος が印欧祖語に溯るのは明らかである。問題は、なぜ πλάτος が語根母音として一般的な e 階梯ではなく、零階梯の \*pṛ<sub>1</sub>th<sub>2</sub>-os を表わしているかである。この問題について、論者は語根母音に関してはサンスクリット語の práthas- と pṛthú- のほうが古い状態を保持しており、ギリシア語 πλάτος が零階梯を示しているのは、意味的に近い形容詞 πλατύς (< \*pṛ<sub>1</sub>th<sub>2</sub>-ú-) からの二次的な形態的影響の結果であると考えられる。同様の解釈は、たとえば βαρύς“heavy”に対する βάρος“weight”, ταχύς“swift”に対する τάχος“swiftness”などにも与えられる。はじめに示した γένος が零階梯でなく、e 階梯であるのは、類似した意味を持つ u 語幹形容詞を欠いているからに他ならない。

もうひとつの重要な創見は、語根母音に η という延長階梯を持ついくつかの s 語幹名詞の分析においてみられる。たとえば、ἡθος“accustomed place, haunts”や γῆρας“old age”は語根母音として η を持つが、これらの名詞に対しては意味的に近い ἔθος“custom”と γέρας“gift of an honor”がある。ἔθος と γέρας はともに e 階梯の語根を示している。論者は、共時的には別個の名詞として機能している ἡθος と ἔθος などのペアが母音交替のパラダイムにおける強語幹と弱語幹を継承していると考えられる。つまり、両者は起源的にはアクセントが語根部から移動しない、いわゆる acrostatic タイプの母音交替にみられるヴァリエントであったが (\*súēdh-s ~ \*súēdh-s-s)、ギリシア語の先史において微妙な意味の違いによって特徴づけられる 2 つの独立した名詞として機能するようになったと主張する。母音交替のパラダイムにみられるヴァリエントが 2 つの意味的に近い別個の形式となった例は、他の印欧諸言語にもみられる。たとえば、サンスクリット語の vāras “width”と úras “breast”は、\*uér-s ~ \*ur-és- という母音交替のヴァリエントを継承している。また、トカラ語の lut-“drive-away” (< \*h<sub>1</sub>lédh-) と lät-“go out” (< \*h<sub>1</sub>ludh-é) も同様の例である。以上の分析は、s 語幹名詞には、Schindler が指摘した proterokinetic タイプの母音交替だけでなく、acrostatic タイプの母音交替もあったことを明らかにした点できわめて意義深い。

本論文は、印欧語比較言語学の中心的テーマのひとつである母音交替についてのわれわれの理解をいっそう深めるものであり、高く評価すべき内容である。しかし、問題がないわけではない。それは第3章で収集されたデータのすべてにわたって、分析が必ずしも徹底されているとはいえない点である。今後のより詳細な分析によって、また新しい知見が引き出されることも十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2003年3月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。